

ふたたび連続講演会について

橋本 明

昨年の『生涯発達研究』第9号の巻頭言に引きつづき、今回の本誌第10号の特集となっている生涯発達研究所主催の連続講演会の話題をとりあげたい。「人間らしい働き方を考える」という講演会のテーマは、最近の日本の状況を踏まえてのことだが、歴史的に繰り返された問いでもある。そこで、講演会のチラシには次のような文章を掲げて、開催の趣旨を説明することにした。

「わたしたちは、なんらかの形で労働に関わりながら生活をしています。しかし、労働には常に「非対称的な」関係が伴います。雇う側と雇われる側、サービスを提供する者とサービスを受ける者との間には、明白な、あるいは見えない力関係が存在するでしょう。こうした労働の本質と、労働をめぐる現代的な諸問題とが複雑に絡み合い、わたしたちは「人間らしい働き方」から疎外されているのではないのでしょうか。この連続講演会では、働くことの根本に立ち返って労働の意味を問うことから始めて、日本の労働の現状を考えるとともに、障害者就労の問題にも踏み込んで、「人間らしい働き方」を総合的に検討していくことをめざしています。」

というわけで、2017年の10月から12月にかけて、バックグラウンドがまったく異なる3人の方々に登壇していただいた。文字通り三者三様で、講演の内容を要領よくまとめることはできないが、私なりに「人間らしい働き方を考える」について考えたことを再構成すると以下のようなになる。

講演会の順序からは逸脱するが、第3回の角谷勝巳氏の講演「障害者就労支援の現状と課題」から入るのがわかりやすい。ここで再認識したのは、就労支援とは、「就労」を「支援」するだけではないという、ある意味であたりまえのことである。ともすれば、就労といういわば海面上に現れた氷山の一角部分を操作することに専念しがちだが、「安心して働ける」ためには、働く人が身体的・精神的にある程度健康で、生活能力をもち、基本的な労働習慣を内在化しているという基盤を整えていなければならない。これら基

礎部分への支援があつてはじめて、就労支援も可能になる、ということである。とすれば、労働という表層の下には、われわれの身体や精神のあり様と密接に結びついている、生き方、人生観、哲学などが支配する世界が広がっている。

ここで、第1回の大熊玄氏の講演「生きる、働く、齢を重ねる」が想起される。西田幾多郎記念哲学館副館長の肩書きも有する氏は、講演時間の大半を費やしてリンダ・グラットンの著書『ワーク・シフト』を紹介する形で、これからの働き方の大変革について述べていく。その変化予測は説得力のあるもので、私も含めた多くの聴衆が「時代の流れに取り残されたら大変だ〜！」と納得しかけたころ、話は急転換する。グラットンの著述がたかだか「人生100年時代」という狭量な時間の枠内にとどまっているのに対比させて、氏は千数百年も「構造の美しさ」を示し続けている法隆寺の話へと導いていく。それが新鮮に響く。欧米化という月並みな近代日本の発展図式に慣れきったわれわれに、もっと自らの足元を見つめながら、生きること、働くことをじっくり考えないといけない、と感じさせる瞬間だった。第2回の伊藤大介氏の講演「あなたの労働は契約ですか？」でも、労働組合や労働協約の問題をめぐって、わが国と欧米との違いが議論になった。洋の東西にかかわらず、労働に関する法律事務には普遍的なものが多いのだろうが、その運用のされ方は働き方に関する歴史や文化に規定されてくるのだろう。

以上には、私の身勝手な解釈が多く含まれているに違いない。詳細は、本誌の特集を参照していただきたい。